

## 社団法人日本超音波医学会第 84 回学術集会を終えて

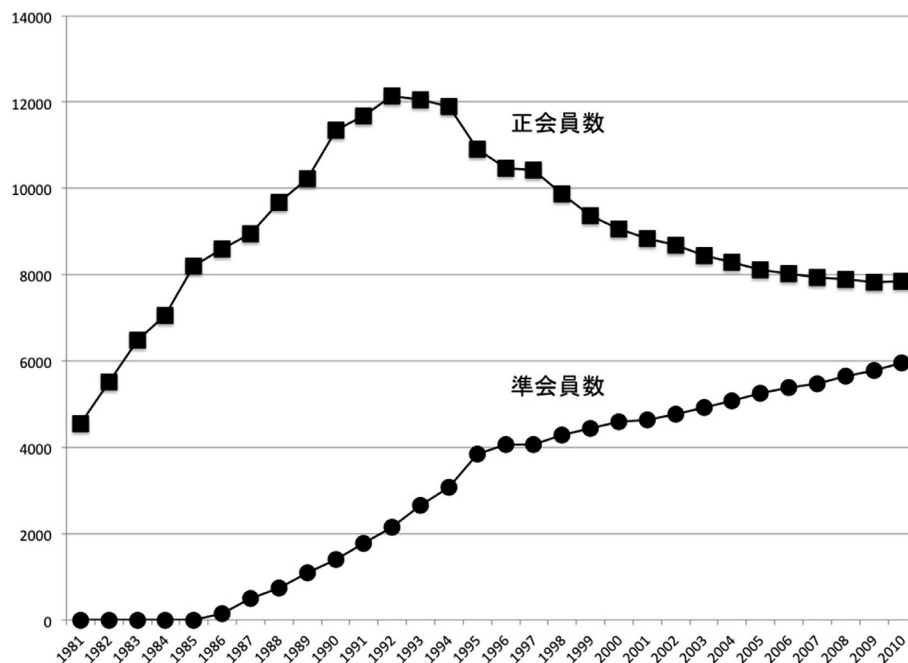
会長 竹中 克

(東京大学医学部附属病院 検査部講師)

「日本超音波医学会は硬直化したつまらない学会だ」という批判を耳にすることがあります。若い医師や技師さんから、企業の方から、さらには大会長を経験されたベテランの先生からも、このような意見を拝聴します。さらに、本学会に限らず、多くの学会で、「研究発表よりも専門資格取得」「学位よりも専門医」という最近の風潮を反映してか、特に医師会員数が伸び悩んでいる、あるいは少しずつ減少しているのも事実です。日本超音波医学会の正・準会員数の推移(過去 30 年)をグラフに示しますが、準会員数が右肩上がりに伸びているのに対して、正会員数は 1992 年の 12,134 名をピークとして減少しています。さらにどんどん会員数が減っていくのな

ら、それは存在価値のない学会ということで、解散すればいいのでしょうか、少なくとも今は何らかの努力が必要な証拠であると考えます。

するべき努力としては、学会をより権威あるものにする(どうやって?), 専門医制度の魅力で引き寄せる, まだ何もわからないような若い学生を勧誘する, 顕彰制度で引き寄せる, などなど, いろいろな案が出てきますが, どれも即効性はなさそうです。幸い, 本学会は, 歴代理事長をはじめとする多くの会員の努力が実って昨年度より正会員数がわずかながら増加に転じ, 底を打った感があり(2009 年 7,821 名→2010 年 7,852 名), これは勇気づけられるデータと言えるかも知れません。



日本超音波医学会の正・準会員数の推移(過去 30 年)

学会の行う事業は、「学術集会開催」と「学会誌出版」が二本柱で、専門医制度や講習会などは第二義的である、と本大会の特別講演で拝聴しました。信念に貫かれた含蓄のある重い言葉と感嘆しました。

日超医を「硬直化したつまらない学会」「医師会員が減っていく学会」から脱却させるには、二本柱

の学術集会と学会誌を面白くするのが一番ではないかと単純に考え、第 84 回では自分自身が参加してみたいと思う企画のみを選択してプログラムを編成しました。テーマは医工技の連携を第一と考え「永遠の三角形」です。もちろん、完成したプログラムは多くの先生の努力の結晶であることは言うまでも

ありません。面白そうなプログラムであっても参加してみると羊頭狗肉であった、では仕方がないですが、学会終了後に、多くの参加者から「おもしろかった！」というお褒めの言葉を頂戴しました。この言葉は本学会とその会員にとって大変嬉しくありがたい言葉です。また、会期中の Twitter には、「5 年たったら日超医で座長をやるぞ！」というおそらく若い先生のものらしい書き込みがありました。若い先生が一瞬であっても、本気でこう考えてくださったのであれば、これもまた心強い「つぶやき」です。

大震災、放射能、節電努力、当日の雨と台風、な

どの影響にもかかわらず、また懇親会が皆無のただただ超音波医学を勉強するだけの会であったにもかかわらず、参加者 3,817 名（招待者も含めると 4,000 名近い参加者）と 414 題という一般演題数、いずれも過去最高の記録となりました。発表会場も展示会場も「超音波医学の熱気」に溢れていました。超音波医学にはまだまだやるべきことがたくさんあります。第 84 回のこの記録が破られて、またその次の記録も破られて、日本超音波医学会が右肩上がりにどんどん面白く活気ある学会になっていくことを祈念して止みません。

「井の中の蛙 大海を知らず されど空の高さを知る」

ありがとうございました！